

精神分析入門

第二部 夢

06／03／02 真鍋 寛

5. 種々の難点と最初のアプローチ

夢は眠りと目覚めとの中間状態であり、母体回帰の状態である。夢とは、眠りを妨げるものからわれわれの睡眠を守ってくれる夜警または眠りの番人である。

→夢とは、眠っている間に働きかけてくる刺激に対して心が反応する仕方である。しかし夢は、たんに刺激を再現するものではなく、加工し、刺激をほのめかし、ある連関の中にはめこみ、その刺激をほかのなにものかで代理する。

6. 夢判断のいろいろな前提と技法

夢は本性の差異を有す「心的」現象である。

→夢を見た人はその夢がなにを意味しているかを知っているが、自分が夢の意味を知っているということを知らない。そのため自分が知らないと信じている。

→方法としての**自由連想**；夢の要素、代理物を浮かび上がらせ、その別の代理物に隠れているものを推測できるようにすること。自由連想はコンプレックスに左右される。コンプレックスの作動は、本人にとって無意識的である。

7. 夢の顕在内容と潜在思想

夢は全体としては或る他のもの、すなわち無意識的なものの歪曲された代理物であり、夢解釈の課題はこの無意識的なものを発見することにある。無意識的なものは、夢見る本人の意識にとっては、到達不能である。

①夢の意味は無視すること、それは決して無意識的なものではない

②夢解釈は、それぞれの要素に対する代理表象を呼び起こすに留め、代理表象について熟考したりしないこと

③隠れた、求められている無意識的なものが自分から姿を見せるまでは、じっと待つこと

→覚えている夢は本来のものではなく、本来のものの歪められた代理物である。この代理物は、われわれが別の代理物を呼び起こして、本来のものに接近すること、すなわち夢の無意識的なものを意識化することに役立つ。

夢の物語るものを「夢の顕在内容」と呼び、いろいろと思ひ浮かぶことを追求して到達できるはずの隠されているものを「夢の潜在思想」と呼ぶ。小児とは異なり、顕在内容と潜在思想は一対一対応せず、両極間には「歪曲」「抵抗」による差異が生じる。

→「自由連想」によってシニフィアン連鎖を紡ぎ出す

換喩と置換

換喩とは〈名前を変える〉というギリシャ語「メトニミー」に由来する。断片や仄めかしによる代理形成によって本質を表すことは、換喩的に「部分によって全体を表すこと」である。夢の分析が隣接関係にある材料の連鎖をたどることによって夢作業を一つ一つ分解することであるなら、換喩の歩みを跡付けることこそが何よりも大切である。シニフィエという基盤の上をシニフィアンが滑走する（隣接性）。



換喩の式

例1（165）

潜在思想「S1／s 1」＝「兄は節約した生活をしている（sich einschränken）」→「兄は節約した生活をすべきだ」

顕在内容「S2／s 2」＝「兄が箱の中に閉じ込められている」→「箱→戸棚 schrank」

例2（166－170）

潜在思想「S1／s 1」＝「あんなに結婚を急いだ自分は馬鹿だった。エリーゼのように、もっと遅くても夫を持てたのに」

顕在内容「S2／s 2」＝「（高く評価していない夫の代理物として）装飾品、良くない席の切符（1.5 フローリンの三枚の切符）」

8. 小児の夢

小児の夢は歪曲を受けていない、純粋に「願望充足」という夢の性格が表現される。「夢は眠りの番人である」

「小児において顕在夢と潜在夢が合致することから、夢の歪曲それ自体は決して夢の本質に属さない」

「眠りの庇護者としての夢の機能、夢は、眠りを妨げる（心的な）諸刺激を幻覚的な充足によって排除する」

「夢を引き起こすものは、常に願望である。願望充足と幻覚的体験」

9. 夢の検閲

「材料の脱漏（新聞検閲の例）」「変容（曖昧にぼかす）」「編成変え（アクセントの移動）」、これが夢の検閲の働きであり、夢の歪曲の手段である。変容と編成変えは「**移動**」と定義する。夢の歪曲は、夜眠っている間に働く許しがたい無意識的願望に対して、自我に容認されている諸意向によって行われる検閲の結果である。

→夢を解釈するときの「抵抗」として夢の検閲を捉え、これを夢作業に帰せしめること。

→夢の歪曲は、一方では、検閲を受けるべき願望がよこしまであるほど、他方では、そのときの検閲の要求が厳しいほど、大きくなる。

→無意識的なものとは、たんに「その時に潜在的である」というだけの意味ではなくて、持続的に無意識であることをも意味する。

10. 夢の象徴的表現

象徴表現は夢の検閲と並んで、夢の歪曲を作る第二の独立した継起である。夢のある要素とその意味との間に存在する恒常的な関係を象徴関係と言う。夢の要素それ自体が無意識的夢思想の一象徴である。象徴的表現は、夢理論中最も注目に値する部分である。

→夢に現れる象徴の圧倒的多数は性的な象徴である。男性器（棒、サーベル、噴水、気球）、女性器（溝、洞窟、壇、箱、リンゴ）

→夢の中では象徴のほとんどすべてが性的な対象や関係を表現するのに利用されている。性的欲求は言葉の成立と発達に最大の役割を果たす。

→ラカン「**ファルス（Φ；象徴的男根）**」（註1）

11. 夢作業

夢作業とは潜在思想を顕在内容に置き換える働きで、主に「**圧縮**」と「**移動（置換）**」からなる。「夢」と呼びうるものは、夢の作業の成果、すなわち潜在思想が夢の作業によって、その中へ連れ込まれた形式である。（**註2**）

→夢の中には「否定」的表現は見つからない。古代言語が対立概念を同じ語根で示すように、夢作業もまたアルカイックである。

①**圧縮**；顕在夢は潜在夢よりヴォリュームが小さい（圧縮されている）。圧縮が生じるのは、検閲というより単純に経済性による。

→圧縮の成立は、「ある種の潜在内容が完全に脱落しているため」「潜在夢の多くのコンプレックスのうち、顕在化するのは一部である」「ある共通性をもついくつかの潜在的要素が顕在夢となる時には融合して一つのものになるため」である。互いに圧縮された個々のものが重なり合うことによって、概して輪郭がおぼろげでぼんやりした像が生じる。融合と組み合わせ

→圧縮の結果、潜在夢と顕在夢との間の関係は複雑になり、顕在夢と潜在夢とを構成している諸要素の関係も単一のものではなくなる。一つの顕在要素が同時に複数の潜在要素に呼応し、また一つの潜在要素が複数の顕在要素にかかわりをもつ、すなわち両者が交叉しあう関係にあることもある（ラカン「クッションの綴じ目」）

隠喩過程としての圧縮

隠喩とは何かを他のものの名によって指し示すことである。顕在内容は、根本的に「重層決定された」ものとして現れる。顕在内容の大部分は、多数の潜在内容を持っていることが連鎖の鎖によって分かる。共通の特徴を持つ潜在内容が互いに融合され、顕在レベルではすべてがただ一つの要素によって表される。換喩が同一の思考対象に対して思考形式が横滑りをするのに対して、隠喩は思考形式それ自体が思考対象となる（シニフィエという基盤がない、あるいは、あるシニフィアンが他のシニフィアンのシニフィエになる）。



隠喩の式

→ラカン『無意識の形成物』における「機知（ファミリア+ミリオネール=ファミリオネール）

②**移動**；「仄めかし」「アクセントの移行」。ある重要な要素から、あまり重要でない要素に移っていく結果、夢の中心部も別のところへ移行する（脱中心化）

③造形的表現；思想を視覚像に翻訳する操作

④二次的加工；夢作業の一時的成果を組み合わせて、ある全体的なもの、ほぼ調和の取れたものを作り出す。

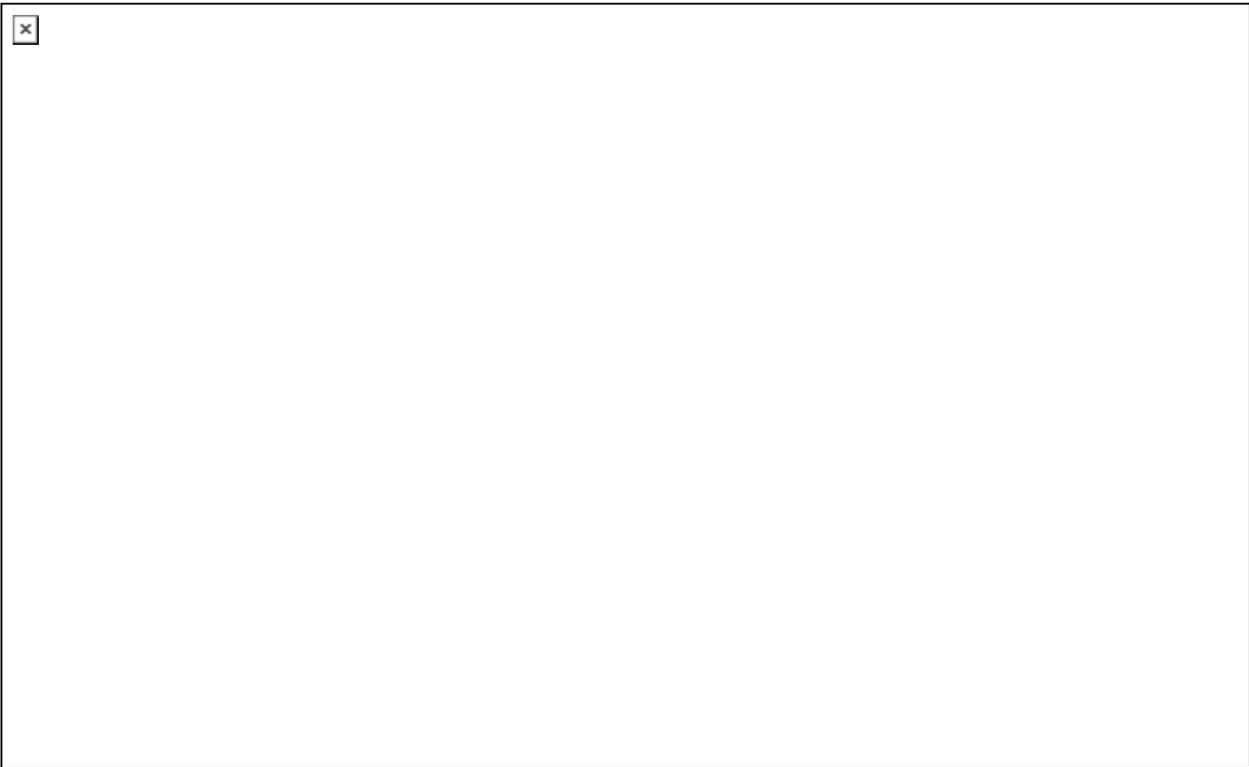
12. 夢の分析例

革製品一般に対する強迫観念を持つ「皮恐怖症」の若い女性の臨床例（『ラカン読解入門』ジョエル・ドール、岩波書店、参照）。この皮恐怖症は彼女が成人に達したとき、母親から贈られた皮のハンドバッグによって発症する。（註3）

①「ワニS6／s6」、6歳のとき動物園でワニを見たとき、その粗暴さに恐怖感を抱く

②「性的禁圧S5／s5」、小学生のとき、母親から性的禁圧を受けるとともに、「そんな不潔なことを続けるなら、おまえの手をワニにちょんぎってもらわよ」と言われる（「去勢」のシニフィアン）。→隠喩；「S6／（S5／s5）」【→s6】。S5はS6ワニに圧縮され、無意識になる。「ワニ」は「性的禁圧」を隠喩的に示す。

③「ワニ皮S12／s12」、数年後、彼女はワニ皮がカバン屋の商品として店頭に並んでいるのを知る→換喩；「皮」というシニフィアンS12が、それ自体「ワニ」S6という換喩的シニフィアンとなる。S12（…S6）／s12【→s6】→恐怖症が引き起こされるためには、母親による皮のハンドバッグの贈物で充分である。皮恐怖は換喩的構成の中でS6が突然（隠喩的ワニ）にとって代わって機能し始める。皮恐怖症⇔S12（…S6／（S5／s5））／s12【→s6】→シニフィアン連鎖の代入の結果、〈皮〉というシニフィアンは、皮の観念とは全く別のものを意味する。それゆえ彼女は〈皮〉を知っている、なぜ皮を恐れるのかを「知らない」（疎外）。彼女の知らないところでS12はS5と結びつく。



13. 夢の太古的性格と幼児性

夢作業の表現方法は「太古的」「退行的」である。幼児期の健忘と、ところどころにこの健忘を破って残っている記憶の残存物との謎。なぜ幼児期の記憶は隠蔽されるとともに、夢において反復されるのか？

→記憶において隠蔽されるとともに、夢において反復されるものとして、「エディプス・コンプレックス」（註4）をはじめとする「性的倒錯」がある。幼児の心的生活は、エゴイズム、近親相姦的な愛の選択等、夢の中、無意識の中に存在し続けている。心的生活における無意識のものとは幼児的なものである。

→「無意識」とは、独自の願望の動き、独自の表現形式、およびそれ以外の世界では活動していない独自の心的機構をもった特殊な心的領域である。これまで夢の解釈において無意識と呼び習わしてきたものは「昼の名残（日中残余）」に過ぎない。日中残余は、「幼児的なもの」という無意識の領域から出てくる他のものと一つになって、夢を形成する。日中残余が、あとから加わってくる無意識的なものによって受ける影響の中に、おそらく退行の条件が含まれている。

→睡眠中に心的活動にこのような退行を余儀なくさせるものは何か？なぜ心的活動は、睡眠を妨げようとする心的刺激を片付けるのに、退行を必要とするのか？

14. 願望充足

夢作業とは、思想や観念を幻覚的体験に置き換えることである。では、夢作業の目標である願望充足はいったいどこにあるのか？

①**情動**、夢作業では内容の意味を変えるよりも感情内容を変えるほうがはるかに難しいため、夢思想中の苦痛の感情の一部が顕在夢中に残されている場合がある。情動は（潜在思想から顕在内容への翻訳に）きわめて強い抵抗を示すので、夢作業が夢思想の苦痛の内容を置き換えて願望充足へ転移したにかかわらず、苦痛の情動は相変わらず残る。

②**不安**、夢を見る人は自分の願望を検閲するため、願望充足は反対に不安を引き起こす。それゆえ不安夢は、剥き出しの願望充足であり、検閲の代わりに不安を生じさせる。

→検閲は自分に対して不意打ちをかけようと狙っている夢の願望に対して、自分が無力だと感じるような状況に置かれた時は、残された最後の手段として、歪曲の代わりに不安を引き起こして眠りの状態を廃棄するという伝家の宝刀を抜く。

③自身の願望充足に抗いながら夢を見ている人は、それぞれ別な人物でありながら、しかも何らかの意味で密接に結びついている**二人の人物**の合体である。しかし、全ては願望充足（夢の中に「否定」はない）であるため、懲罰もまた、検閲を加えるもう一方の人物の願望充足である。

夢の潜在思想、無意識の二つのあり方（二人の人物）、「日中残余」と「無意識的願望」

夢における唯一本質的なものは、潜在思想という素材に働きかけた夢作業である。夢は決して単なる計画や警告ではなく、常にある無意識的願望の力を借りて計画や警告などが太古的な表現に翻訳され、願望を従属するために変形したものである。夢は日中の潜在的願望を、ある無意識的な願望の助けを借りて、充足されたものとして表現している。

→日中残余は潜在思想の一部に過ぎず、この日中残余の上に、これも無意識に属している「あるもの」、すなわち強力であるが抑圧を受けていた願望の動きが付加されて、この願望の動きのみが夢を形成することができる。この願望の動きが日中残余に及ぼす作用が、夢の潜在思想の他の部分、すなわち、もはや覚醒時の生活にもとづいて理解できる合理的なものともみえる必要のない部分を生み出す。

→ [317]「日中残余」と「無意識的願望」は、「経営者」と「出資する資本家」の関係である。無意識的願望は夢を形成するのに必要な心的エネルギーを供給し、経営者としての日中残余は、この費用をいかに使うかを決定する。（註5）

15. 不確実な点と批判

無意識の領域を支配している機構、すなわち夢作業における圧縮と移動の作用のように、神経症もまた、心的生活の諸々の力と力との関係の変化にもとづくものに過ぎない。

註

- 1) ラカン派精神分析におけるファルス的重要性。ファルスとは去勢（＝検閲）のシニフィアンであるが、言い換えれば、このシニフィアンによってはじめて圧縮と置換のエコノミーが可能となる。それは「もの=X」と「ことば=X」を結びつける「行為=X」ないし「対象=X」であり、人間が言語を使用する上で欠かせない、あらゆる意味の中の「無意味」として運動する永久動体である。ハイデッガー「存在論的差異（非－存在）」あるいは「精神」。ゴダールが「ノートル・ムジック」で見せた「イマージュの仮面の下の髑髏（死）」
- 2) 従来の形而上学であれば潜在思想と顕在内容は「原因－結果」の因果関係として規定されるが、フロイトの夢理論は、形而上学的因果関係を断ち切り、潜在思想と顕在内容の「あいだ」の亀裂ないし変形過程そのものを「夢作業」として前景化する。因果関係による階層序列を秩序とする形而上学に対して、仮面・偽装・置換・感染・変形・散種の過程を重視することで形而上学的「表象＝再現前性」を批判している。カミュ「異邦人」は「母が死んだ／女友達と海で遊ぶ」「太陽がまぶしい／アラブ人を殺す」のように社会的因果関係に亀裂を入れる男（ムルソー）を描いた。また、D&Gはリトルネロ論はじめ、自然と人工の隔てなく、あらゆるアレンジメントや多様体を「反復」の効果として表現している。
- 3) ラカンはフロイトの「圧縮」と「置換（移動）」を、言語学の隠喩と換喩によって構造の二つのセリーを規定している。また、構造主義に共通する二つのセリー（差異化＝微分化／異化＝分化、圧縮／置換）はロラン・バルトの「アルゴ船」の例が解りやすい（「彼自身によるロラン・バルト」54 参照）。アルゴ船の一行は神々から、同一の船＝アルゴ船によって、それも徐々に確実にやってくる船の老朽化にさらされながら、長い航海を完了することを命じられる。航海の途中で、一行は徐々に船体の各部品を交換していき、その結果、彼らはついに、その名も形も変えることなく、全く新しい船となったアルゴ船で航海を終えた。「構造」のアレゴリーとしてのアルゴ船とは、「置換」（一つの範例の中で起きるように、ある部分が他の部分に取って代わること）と「命名」（名称は、いかなる点でも、個々の部分の不変性には縛られない）という二つのエレメントである。同一の名称の下での組み合わせによって、元通りのものは何一つ残されないというアルゴ船の航海は、一連の夢作業の過程と近似する。ラカンのマッピングは、都市や風景をひとつの無意識と捉えた新しい分析方法につながるかもしれない（データ・スケープ）。
- 4) 「エディプス・コンプレックス」とは、「物自体からの触発がなければ認識は成立しないが、物自体を認識することは不可能である」というカント『純理』のアンチノミーの精神分析版と考えられる（特にラカン）。幼児は母の欲望（「物自体」）との同一化を欲望するが、その欲望は象徴的父によって去勢＝検閲される。言うまでもなく、去勢＝検閲を司るのがファルスである。
- 5) 資本と経営者（無意識的願望と日中残余）という「二つの人物」は、ドゥルーズの『差異と反復』の構成に表現されている。「1章；それ自身における差異（差異化する者、差異の即自存在）」「2章；それ自身に向かう反復（反復する者、差異の対自存在）」の「二人」の観点から述べ、「4章；差異の理念的総合」「5章；感覚されうるものの非対称的総合」と反復している。二重の肯定。